

はしがき

目次

本書は、文語文法の重要な事項を整理しながら、演習問題を通して学習し、基礎力を養うことを目的に編集されたワークブックです。また、編集にあたっては、日栄社版『新・要説文語文法 五訂新版』の準拠問題集としても、あるいはまったく独立した文語文法の基礎問題集としても使うことができるよう配慮しております。

本書の特長は次のとおりです。

- ① 各回とも見開き2ページにまとめて、上段に「演習問題」を、下段に「学習のポイント」を収録し、授業にも自学自習にも用いることができるよう留意しました。
- ② 問題文は比較的平易なものを厳選し、必要に応じて問題文の左側に色刷りで口語訳をつけ、効果的な学習ができるようにしました。また、解答書き込み式としました。
- ③ 「学習のポイント」には文法事項を整理し、重要な箇所は太字体にしたり色刷りにするなどアクセントをつけ、丁寧に解説しました。本欄は同時に演習問題のヒントにもなっています。
- ④ 用言・助動詞・助詞の各单元の最後には「まとめ」

- として、ある程度まとまりのある文章を読みながら、復習を兼ねた発展的な問題演習ができるようにしました。さらに、本書の最後には「総合問題」も設けました。
- 本書では、名詞・副詞・連体詞・感動詞・形容動詞についても学習できるよう配慮しました。
- 表見返し・裏見返しに、動詞・形容詞・形容動詞の活用表と助動詞・助詞の一覧表を、また巻末に主要敬語・まぎらわしい語の識別の一覧表を掲載し、学習の便を図りました。
- 文語文法は、用語をはじめ諸説ある場合もありますが、本書は、『新・要説文語文法 五訂新版』を基本に数種の文法書等も参考し編集しました。
- (注)「」で動作主などを補った部分については、現代仮名遣いとしました。
- 本書が、皆さんの古文学習の一助となることを祈っています。

1 文語文法入門	2 用言・動詞の活用	3 動詞	4 動詞	5 動詞	6 動詞	7 動詞	8 形容詞	9 形容動詞	10 用言のまとめ	11 助動詞	12 助動詞	13 助動詞	14 助動詞	15 助動詞	16 助動詞	17 助詞	18 助詞	19 助詞	20 助詞	21 助詞	22 助詞	23 名詞・副詞・連体詞	24 感動詞・接続詞	25 敬語	26 敬語	27 文の構造・修辞	28 まぎらわしい語の識別	29 総合問題								
① 四段・上一段・下一段・上二段・下二段	① 力行変格・サ行変格・ナ行変格・ラ行変格	② 活用の種類・活用形の見分け方	③ 補助動詞・自動詞・他動詞・動詞の音便	④ 活用の種類・活用形の見分け方	⑤ まとめ	⑥ まとめ	⑦ まとめ	⑧ まとめ	⑨ まとめ	⑩ まとめ	⑪ まとめ	⑫ まとめ	⑬ まとめ	⑭ まとめ	⑮ まとめ	⑯ まとめ	⑰ まとめ	⑱ まとめ	⑲ まとめ	⑳ まとめ	㉑ まとめ	㉒ まとめ	㉓ まとめ	㉔ まとめ	㉕ まとめ	㉖ まとめ	㉗ まとめ	㉘ まとめ	㉙ まとめ							
8	6	5	4	3	2	1	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
14	12	11	10	22	20	18	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1				
12	10	9	8	24	22	20	18	16	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1				
10	8	7	6	26	24	22	20	18	16	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1			
8	6	5	4	28	26	24	22	20	18	16	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1		
6	5	4	3	28	26	24	22	20	18	16	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1		
4	3	2	1	28	26	24	22	20	18	16	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1		

助動詞① る・らる・す・さす・しむ・す

1 僮線部の助動詞の活用表を作りなさい。

- (a) 無下のことをも仰せらるるものかな。
どんでもないこと。
- (b) 御身は疲れさせ給ひて候ふ。
あなたは
- (c) 見苦しとて、人に書かするはうるさし。
字が下手だから
- (d) 何によりてか目を喜ばしむる。
- (e) 敵に首を取られねども、痛手なれば死にけり。
かたきに重傷

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
⑥						
⑤						
④						
③						
②						
①						

次の()内の助動詞を適當な形に活用させて書きなさい。また、活用形も書きなさい。

- (a) 名を聞くより、やがて面影は推しはから ①(る) 心地するを、……
聞くやいなや、すぐに『その人の』顔かたちは
- (b) 問ひつめ ②(らる) て、え答へずなりはべりつ。
答えることができなくなってしましました。
- (c) 「なんぢが巻か ③(す) て持たせたる旗、揚げ ④(さす)。」
家米に巻かせてお入れになつた。
- (d) 人を苦しめ、法を犯さ ⑤(しむ) て、それを罪なはむ事、不便のわざなり。
それを罪とするよくなことは、不都合な
- (e) 世にこと古りにけるまで知ら ⑥(はず) 人は、心にくし。
珍しい当世風の事柄を世間で言い古されてしまふまで 奥ゆかしい。

⑦	④	①	形	形	形	形
⑧	⑤	②				
			形	形	形	形
			⑥	③		
					形	形

(f) 俊成卿は、忠度が故郷の花といふ題にて、詠ま ⑦(る) たりける歌一首ぞ、

詠み人知らずと入れ ⑧(らる) ける。

(g) 俊成卿は、忠度が故郷の花といふ題にて、詠ま ⑦(る) たりける歌一首ぞ、

詠み人知らずと入れ ⑧(らる) ける。

3 次の文中から、ア—受身、イ—尊敬、ウ—可能、エ—自発、オ—使役、カ—打消の助動詞を全て抜き出し、その意味を記号で答えなさい。また、活用形も書きなさい。

- (a) 私が御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、中宮様は笑はせ給ふ。
御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、中宮様は笑はせ給ふ。
- (b) 盗人なりければ、国の守にからめられにけり。
縛られてしまつた。
- (c) 験あらむ僧たち、祈り試みられよ。
験あるよな
- (d) 秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる
秋の季節が来たと見た目にはほつきりとはわからないが
- (e) あしひきの山行きしかば山人のわれに得しめし山づとぞこれ
山に行つたところ 山の上産はこれだよ。
- (f) 大井の土民に仰せて、水車を造らせられけり。
住民

学習のポイント

■ 助動詞

付属語で、活用する。他の語に接続して種々の意味を添える。活用・接続・意味の三つをきちんと覚える必要がある。

「る・らる」

接続 下一段型

る	未然	連用	終止	連体	已然	命令
らる	られ	れ	る	るる	るれ	れよ

活用 下二段型

る	四段・ナ変・ラ変動詞の未然形	【らる】右以外の動詞の未然形
らる		

次の()内の助動詞を適當な形に活用させて書きなさい。また、活用形も書きなさい。

- (a) 名を聞くより、やがて面影は推しはから ①(る) 心地するを、……
聞くやいなや、すぐに『その人の』顔かたちは
- (b) 問ひつめ ②(らる) て、え答へずなりはべりつ。
答えることができなくなってしましました。
- (c) 「なんぢが巻か ③(す) て持たせたる旗、揚げ ④(さす)。」
家米に巻かせてお入れになつた。
- (d) 人を苦しめ、法を犯さ ⑤(しむ) て、それを罪なはむ事、不便のわざなり。
それを罪とするよくなことは、不都合な
- (e) 世にこと古りにけるまで知ら ⑥(はず) 人は、心にくし。
珍しい当世風の事柄を世間で言い古されてしまふまで 奥ゆかしい。

(f) 俊成卿は、忠度が故郷の花といふ題にて、詠ま ⑦(る) たりける歌一首ぞ、

詠み人知らずと入れ ⑧(らる) ける。

(g) 俊成卿は、忠度が故郷の花といふ題にて、詠ま ⑦(る) たりける歌一首ぞ、

詠み人知らずと入れ ⑧(らる) ける。

3 次の文中から、ア—受身、イ—尊敬、ウ—可能、エ—自発、オ—使役、カ—打消の助動詞を全て抜き出し、その意味を記号で答えなさい。また、活用形も書きなさい。

(a) 私が御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、中宮様は笑はせ給ふ。
御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、中宮様は笑はせ給ふ。

(b) 盗人なりければ、国の守にからめられにけり。
縛られてしまつた。

(c) 験あらむ僧たち、祈り試みられよ。
験あるよな

(d) 秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる
秋の季節が来たと見た目にはほつきりとはわからないが

(e) あしひきの山行きしかば山人のわれに得しめし山づとぞこれ
山に行つたところ 山の上産はこれだよ。

(f) 大井の土民に仰せて、水車を造らせられけり。
住民

活用 下二段型

*「な・に」の活用は奈良時代に用いられた。表の左端の系統は、ラ変型活用。

特殊型 活用語の未然形

〔しむ〕活用語の未然形

〔す〕四段・ナ変・ラ変動詞の未然形

〔さす〕右以外の動詞の未然形

〔せ〕連用

〔せ〕終止

〔せ〕連体

〔せ〕已然

〔せ〕命令

す	未然	連用	終止	連体	已然	命令
られ	られ	れ	る	るる	るれ	れよ

す	未然	連用	終止	連体	已然	命令
られ	られ	れ	る	るる	るれ	れよ

「す・さす・しむ」

尊敬。下に尊敬語・敬意を表す人物がくるときはは

受身の主語は生物(人間)であつて、無生

物が主語になるのはきわめてまれ。

自然とそういう気持ちになる意。

②可能「…コトガデキル」

打消・反語表現の中で用いられることが多い。

③受身「オ・ニナル・ラレル」

受身の主語は生物(人間)であつて、無生

物が主語になるのはきわめてまれ。

自然とそういう気持ちになる意。

④尊敬「オ・ニナル・ラレル」

上に尊敬語・敬意を表す人物がくるときはは

尊敬。下に尊敬語がくるときは受身か自発。

(e)	(c)	(a)				
			形	形	形	形
形	形	形				
(f)	(d)					
			形	形	形	形
			形	形	形	形

▼「ずは」に次の二つの説がある。

- 連用形「ず」+係助詞「は」
- 〔モシ: デナイナラバ〕

和歌に多く用いられる「なくに」(ク語法)

- 奈良時代の打消の助動詞「ず」の未然形「な」
- 接尾語「く」+逆接の接続助詞「に」

ざるめり→ざんめり
ざるなり→ざんなり

1 次の敬語について、敬意のない動詞を()内に書きなさい。

- ① のたまふ () ② 大殿(おほとの)もる ()
 ③ おぼす () ④ おはす ()
 ⑤ 聞こしめす ()

2 次の傍線部の敬語を、ア—尊敬語、イ—謙譲語、ウ—丁寧語に分類し、記号で答えなさい。

(a) 「また異所(ことどける所)に、かぐや姫と申す人ぞおはすらん。」

(b) 子は京に宮仕(宮中にお仕えしていいたので)へしければ、……〈母である内親王の所に〉しばしばえまうです。

(c) 「夜更けはべりぬ。」と聞こゆれど、なほ入り給はず。

(d) 九月二十日のころ、ある人に誘はれ奉りて、明くるまで月見ありくことはべりしこ、おぼしいづる所ありて、案内せさせて入り給ひぬ。

(e) 惟喬の親王(これたかみこ)、例の狩りしにおはします供に、右馬の頭なる翁(おきな)つかうまつれり。

(f) 〈桐壺の更衣の母君(きりつぼのめいこ)が命婦に〉、「うちうちに〈私が〉思ひ給ふるさまを奏し給へ。」

(g) 女御殿(ようごてん)、対の上(うわ)は一つ

〈の車〉に奉りたり。

⑧	①
⑨	②
⑩	③
⑪	④
⑫	⑤
⑬	⑥
⑭	⑦

種類	本動詞・ 補助動詞・ 詞	誰の	誰に対する
⑩			
⑨			
⑧			
⑦			
⑥			
⑤			
④			
③			
②			
①			

- 3 傍線部の敬語の種類は、a—尊敬語、b—謙譲語、c—丁寧語のどれか。また、動詞の場合は、ア—本動詞か、イ—補助動詞かを記号で書きなさい。また、誰の、誰に対する敬意かを書きなさい。

中納言参り(中納言の前)給ひて、御扇奉らせ給ふに、〈中納言〉「隆家こそいみじき骨は得てはべれ。それを張らせて参らせむとするに、おぼろけの紙はえ張るまじければ、求めはべるなり。」と申し給ふ。〈中宮〉「いかやうにかかる。」と問ひ聞こえさせ給へば、〈中納言〉「すべていみじうはべり。」(まだ見ぬ骨のさまなり)となんむ人々申す。まことにかばかりのは見えざりつ。」(高く得意げに)と聞こえへば、〈作者=清少納言〉「さては、扇のにはあらで、くらげのななり。」と聞こゆれば、〈中納言〉「これ隆家が言にしてむ。」とて笑ひ給ふ。
(たまつたき)

■ 敬語の解釈の仕方

敬語が出てきたら次のように考える。

① 地の文か、それ以外（手紙文・会話文など）

か、を判断する。

② 敬語の種類を特定する。

③ 誰の、誰に対する敬意か、を明確にする。

「誰の」
会話文→作者の

「誰に対する」
尊敬→動作をする人に

〔謙譲→動作の受け手に
丁寧→聞き手に〕

④ 主語等を補って口語訳する。

△ 敬語の口語訳

① 尊敬	オニナル
② 謙譲	ナサル
③ 丁寧	シニアゲル
	イタス
	ティタダク
	オスル
	マス
	ゴザイマス

学習のポイント

敬語の種類／敬意の対象

敬語の学習では、「誰の、誰に対する敬意か」を考えることが大切である。（以下、△は敬意の方向を示す。）

① 尊敬語—話し手（書き手）が、動作をする人に語を用いて表現する。
地の文・書き手（作者）△動作をする人

敬意を表すために、その人の動作・状態に敬意を表すために、その動作に敬語を用いて表現する。

② 謙譲語—話し手（書き手）が、動作を受ける人（会話文・手紙文・話し手）が、聞き手（読み手）に敬意を表すために、丁寧に表現する。

③ 丁寧語—話し手（書き手）が、聞き手（読み手）に敬意を表すために、丁寧に表現する。（聞き手尊敬）

地の文・書き手（作者）△動作を受ける人（会話文・手紙文・話し手）△動作を受ける人

* 受け手—動作をする人。

* 受け手—為手の動作を受ける人。

地の文・書き手（作者）△読み手（会話文・手紙文・話し手）△聞き手（読み手）

* 為手—動作をする人。

* 為手—動作をする人。

地の文・文中で、会話文や手紙文、和歌などを除いた、説明・描写している部分。

■ 敬語に用いられる名詞・接頭語・接尾語

① 名詞・代名詞	帝 <small>(みだい)</small> ・上 <small>(おの)</small> ・大君 <small>(おほきみ)</small> 〔尊敬〕
（普通名詞） （代名詞）	お供 <small>(おほとも)</small> ・御身 <small>(みみこ)</small> ・殿 <small>(どの)</small> ・みまし〔尊敬〕
	おのれ・わらは・それがし〔謙譲〕